

【書評】

大いなる〈序章〉、あるいは助走
—横道誠著『村上春樹研究 サンプリング、翻訳、アダプテーション、批評、
研究の世界文学』—

内田 康
(京都府立大学 共同研究員)

横道誠氏といえば、目下世間では主として、ここ二、三年の間に陸続と刊行された発達障害の当事者研究、および宗教2世問題の領域における八面六臂の活躍を通して、広く知られているのではないと思われる。氏は三年前に初の単行本単著『みんな水の中—「発達障害」自助グループの文学研究者はどんな世界に棲んでいるか』(2021年4月、医学書院)を出し、更に一年も経たずに同じく『唯が行く!—当事者研究とオープンダイアログ奮闘記』(2022年2月、金剛出版)を世に問うて後は、ほぼ丸二年のうちに、共著・編著も含め平均して二ヶ月に一冊以上、合計15冊という怒濤の如きペースで著書を出版してきている。評者が本稿を執筆している2023年12月時点で、上記2冊をはじめとした発達障害に関わるものが9冊、またメディアへの露出と関連の深い宗教2世問題を扱ったものが3冊、そして氏の本来の専門である文学研究方面の書籍が3冊という内訳になり、今回取り上げる『村上春樹研究 サンプリング、翻訳、アダプテーション、批評、研究の世界文学』(2023年9月、文学通信)は、当然この第三の категорияに含まれる。

評者が横道氏の論考に初めて目を通したのは、自分でも何度か原稿を寄せたことのある勉誠出版(現・株式会社勉誠社)『アジア遊学』の、217号『「神話」を近現代に問う』(植朗子・南郷晃子・清川祥恵 編、2018年4月)に収録された「神話と学問史—グリム兄弟とボルテ／ポリーフカのメルヒェン注釈」(このテーマは後年、氏が京都大学に提出した博士論文、およびそれに基いた大著『グリム兄弟とその学問の後継者たち—神話に魂を奪われて』(2023年9月、ミネルヴァ書房)へと結実することになる)であり、元来日本神話の後世への受容に関心を持っていた評者にとって、その時「横道誠」という名は、一人のドイツ文学研究者として認識されたに過ぎなかった。ところがそれから間もなく、山根由美恵氏の示唆を受けて接したのが、本書の原型となった論文「村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の3つの論点—7つの翻訳(英訳、フランス語訳、2つの中国語訳、ドイツ語訳、イタリア語訳、スペイン語訳)、ポップカルチャーの変質とセカイ系の現状(あるいは新しい文学史の希求)、大江健三郎の「ファン」としての村上—」(『MURAKAMI REVIEW』0号、2018年10月、村上春樹研究フォーラム)であった。これを読んだ時の衝撃を、評者は今も忘れることはできない。その理由は、一冊の単行本に相当するような分量や、副題の異様な長さではなく、—いや、あらためて思えば、それもあつたには違いないけれども、それ以上に—今後の村上春樹研究の方向性が如何にあるべきか、評者が漠然と空想しながら、自らの力不足に

よって手を付けられずにいた内容が、或いは、少なくともその端緒が、目に見えるかたちをとってそこに展開されていたからである。当時評者は勤務先だった台湾の淡江大學に置かれた村上春樹研究センターの成員として、その名の示す通り村上春樹に関する研究活動に携わっていたが、氏の論文を読了するや、「このような研究者が現れたからには、自分のすべきことは（村上春樹研究においては）もはやない」とさえ本気で思った。それも、だから「これからどうしよう…」というのではなく、自分が上手く表現できずにもどかしい気持ちでいたことを、掌を指すように流麗に説き尽くしてくれる筆致に、寧ろ清々しさすら覚えた程である。あれから5年、我々の社会的な状況はもとより世界の相貌も一変したが、嘗て自分を激しく揺さぶった論考が、こうして時を経てヴァージョン・アップした姿で公にされたという事実に大きな慶びを感じ、それを言葉にできれば、と率直に思った。…ところが、「あとがき」を開いて見ると、本書が捧げられる対象として五番目に評者の名前があり、剰え「筆者にとって、ほかのどの村上研究者よりも内田さんとの出会いが大きかった」とまで書かれている。勿論、これは評者が氏の依頼を受けて本書を草稿段階で通読し、些かのコメントを寄せたことへの著者なりの謝辞であるには違いない。けれども、かかるかたちでこの著作に一種の「当事者」として公然と関わってしまった身としては、いくら確かに内心で「横道誠は褒めるしかない」と思っていたにせよ、その評価は、所詮〈内輪褒め〉の域を出ないもの、と読者から割り引いて受け取られたとしても仕方あるまい。とはいえ、それを承知の上で結局この書評を書こうと決意したのは、本書が、著者自身が原型論文の方を評して、「テーマは枝分かれして論文として破綻しかけ（あるいはすでに破綻してしまっていて）、絶望的なものだった」（本書「あとがき」p.376）と述べた特質を多少継承しつつも、なぜ村上春樹の作品が研究されるべきなのかを多面的に論じていることの意義を、氏のこの研究を諸手を挙げて肯定する評者こそが、自分なりに言語化し返さなければならない、と思いついたからである。以下、原型論文とも対比しつつ、本書に分け入っていきたい。

まず、本書の目次を掲げて全体の構成を俯瞰してみよう。

- 序 ポリフォニーを志向する研究書
- I 「大江・筒井・村上」が結ぶ星座
 - 第一章 大江健三郎の「ファン」としての村上春樹
 - 第二章 村上が「好きな作家」としての筒井康隆
- II 海外体験と外国語訳
 - 第三章 渡独体験を考える―「三つのドイツ幻想」と「日常的ドイツの冒険」
 - 第四章 『国境の南、太陽の西』とその英訳、新旧ドイツ語訳
 - 第五章 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の八つの翻訳
(英訳、フランス語訳、ふたつの中国語訳、ドイツ語訳、イタリア語訳、ロシア語訳、スペイン語訳)
- III 音楽・映画・ポップカルチャー
 - 第六章 音楽を奏でる小説―『ノルウェイの森』を中心とした諸考察

補論 村上春樹と「脳の多様性」—当事者批評と健跡学へ

第七章 自閉スペクトラム症的／定型発達の

—映画『バーニング』と『ドライブ・マイ・カー』について

第八章 ポップカルチャーの文学的トポス

結語 ポリフォニーを聴くこと

さて、では横道氏は、この研究全体を通じて一体何を目指そうとしたのだろうか。それを解く鍵は、「序」と「結語」に掲げられた「ポリフォニー」にあると考えられる。「ポリフォニー（多声性）」といえば、ミハイル・バフチンがドストエフスキーの作品に見出した特徴のことが想起されるが、横道氏によれば、村上春樹の小説は、この意味での「ドストエフスキー的」な文学作品とは異質なものであるにもかかわらず、そこからは「さまざまなテキストに現れた文学的モチーフ、文体、物語構造の全体」としての「文学的諸現象のポリフォニー」（同 p.15）を聴き取ることが可能なのであって、その多声性は「村上と先行テキストのあいだ、つまりサンプリング行為を介して現れるもの」だけではなく、「村上作品の翻訳やアダプテーション、そして村上やその作品に対する批評や論文」（同 p.15-16）にまで及ぶという。これを評者なりに敷衍するなら、ジェラルド・ジュネットが『パランプセスト』で述べた超テキスト性（*transtextualité*）、特にそのうちのメタテキスト性（*métatextualité*）や、中でもイペルテキスト性（*hypertextualité*）に注目した読みの実践、といったイメージが思い浮かぶ。（そういえば今から四半世紀も前、學燈社『國文學』臨時増刊で特集されたタイトルが、これとは無関係ながら「ハイパーテキスト・村上春樹」であった。）あるいは、横道氏が本書をまとめる際にもジュネットが念頭に置かれていたのかもしれないが、少なくとも評者は、かかるアプローチを試みるのに村上春樹という作家がうってつけであるとぼんやり考えていたからこそ、氏の研究にも瞠目したわけである。

続いてその具体的内容に目を向けると、一見して明らかなように、原型第1章「7つの翻訳」が本書第II部の第五章、同じく第2章「ポップカルチャーの変質とセカイ系の現状—あるいは新しい文学史の希求—」が第III部第八章、そして第3章「大江健三郎の「ファン」としての村上」が第I部第一章と、核心的「3つの論点」を底に留めながらも構成順序は大きく改変されている。そこでまずこの第一章だが、計400頁程の本書のうちで80頁分、全体の五分の一に及ぶ分量を有し、勿論最長の章である。従来、大江派か村上派かで対立的関係に陥りがちだった現代日本文学の状況に、「大江と村上」という両者を併せて捉えるべきだと主張した、今は亡き加藤典洋の姿勢への賛同から、大江の「ファン」の一人としてその文学を「サンプリング」しつつ自らの作品を構築していった村上の創作の在り方を丹念に検証した好論で、元来〈大江読み〉だった横道氏の面目躍如たる感がある。だが、評者が草稿に目を通して最初に気になったのは本章の位置であった。原型論文では第1章の翻訳論、第2章のポップカルチャー、と読み進めてきて、満を持してこの第3章に至るといふ構成だったからこそ、その論理展開に導かれて素直に読めたけれども、のっけからこの濃厚な成果を突き付けられては、読者にとって、ステーキ専門の某チェーン店の名ではないが、いきなりステーキを振る舞われるようなことになるのでは、と危惧し、その旨を著者に伝えた上で、仮に原

型から構成を組み換えるのであれば、総論的で、且つ評者が初読で最も感心した原型の第2章の方を前に置いてはどうかと提案した。しかし、横道氏は自身の構成案に拘わり、結果としてこのかたちでの出版になったのだが、出来上がった本書を再び通読した評者としては、当時の自らの不明を慚じるよりほかない。多少弁解をするなら、評者の中にあつた原型論文のインパクトの残像に眩惑されたためと言えなくもないが、一つ重要な点は、原型の方が「村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の3つの論点」というタイトルの示す通り、あくまでも『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』論として構築されたものだったのに対して、本書はそれを新たに『村上春樹研究』という更に大きな枠組へと発展させているという事実である。そしてその過程において、大江と村上をめぐる濃密な一章が巻頭を飾ることになったのみならず、評者が感銘を受けた原型第2章は最終章へと移行し、本『研究』全体を見事に締め括るに至ったのだが、この点についてはまた後で述べよう。いずれにせよ本書第一章は、やはり著者の愛読する筒井康隆の村上春樹による「サンプリング」の諸相を分析した第二章とともに、これまで軽視される傾向にあつた、村上文学への日本近現代作家からの看過しがたい影響の解明を強く迫る問いかけとして、大きな意義を持っているわけだが、敢えて言えばこの問題設定は、横道氏の扱った二人の作家に止まらず、かく言う評者も、原型論文に励まされるかたちで村上と福永武彦を併せ見る可能性を検討したように、更に多くの作家たちとを結ぶ「星座」の探究へと導かれるべきものであろう。また「大江と村上」という組み合わせについても、就中、大江が世を去ってその全貌があらためて問い直されるであろう今からは、よりまとまった研究が必要となってくるはずだ。これについてもまず、加藤の衣鉢を継ぐと公言した横道氏自身に、多大なる期待がかかっていくことは間違いあるまい。

次に第II部は、先述したように原型論文の第1章における考察（にロシア語訳の部分を加えたもの）を骨子とする。この第五章は、アルフレッド・バーンバウムの手に成った「突出して日本語原典と乖離している」（本書 p.197）英訳『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の持つ独自の工夫を、その他の言語への翻訳版と丁寧に比較検討しつつ分析を施したもので、多言語を操る横道氏ならではの貴重な成果と言える。これに加えて、村上の渡独体験が作品に及ぼした影響を考察した第三章、『国境の南、太陽の西』の、英訳版からの重訳と日本語版からの直接訳という二種類のドイツ語訳が孕む問題を扱った第四章も、著者のドイツ文学研究者としての見識が縦横に巡らされており、「村上春樹」が何故そして如何に「世界文学」たりうるかが、作家自身の、更に「翻訳」を通じた作品たちの「海外体験」へと焦点を当てて論じられている。日本文学の枠に収まらない村上の文学を今後研究していく際、氏の方法は大いに参照されるべきである。

そして第III部になると、著者の言う意味での本書の「ポリフォニー」的な性格の度合は、益々高まる。第六章で、村上の小説自体が持つ音楽性に焦点が当てられるところなど、この研究書が志向する「ポリフォニー」をそのまま体現していよう。更に補論と第七章では、横道氏が文学の研究と並んで力を注いでいる発達障害をめぐる問題への知見を駆使し、前者で専ら小説作品の、また後者で『バーニング』『ドライブ・マイ・カー』という近年の映画へのアダプテーション作品二本の、実践的な「当事者批評」が行われており、どちらも方法的革新性が輝きを見せている。

だが評者は敢えて、原型論文の第2章に基いた最後の第八章こそ、本『研究』の白眉だと断言し

たい。もし一冊全部を読む時間がないという読者がいたら、この章だけでも読むべきである。とりわけ重要なのは、著者による以下の言揚だろう。「私たちはもう「文学の文学史」ではなく、「文学的想像力の文学史」を考えるべきだと主張したい」（本書 p.332）。本章の章題に掲げられた「文学的トポス」とは、『ヨーロッパ文学とラテン中世』等を遺した E.R.クルツィウスによる概念で、文学の流れの中で継承されていくモチーフや類型などだが、横道氏はこれをポップカルチャーの領域にまで持ち込み、漫画雑誌『ガロ』から東浩紀や幾原邦彦、新海誠ら「セカイ系」の創作に至るまでの、村上が影響を受け、また村上に影響を受けた、現代日本のポップカルチャーの展開過程を、所謂「文学」のそれと併せて総合的に把握しようと企図するのだ。このような、「世界文学」と「セカイ系」とが「村上春樹」において交差する、などという壮大な見取り図を示されたら、眩暈を起ささない方がどうかしている。けれども考えてみれば、所謂「純文学」とポップカルチャーとの双方に深く根を下ろした村上の文学の全貌を解明するのに、この「文学的想像力の文学史」というアプローチほど最適なものがあるに他にあるだろうか。評者が、本書の草稿段階でこの章を一冊全体の総論として先頭に置くことを著者に提案した経緯は既述したが、それが誤りだったというのは、本章が最後に据えられることで、実は本書全体が、ここから始まる横道誠の大いなる『村上春樹研究』の〈序章〉、もしくは、筒井康隆の小説のタイトルを借りるなら「大いなる助走」となっているのを、見事に証明している事実一つ取っても明らかだろう。

またもう一点、是非とも注意を促しておかねばならないことがある。横道氏は「あとがき」の末尾 (p.377) でこう語っている。「本書に先立って刊行した『みんなの宗教2世問題』(晶文社、二〇二三年)の「5章 宗教2世はいかに描かれてきたか——関連する日本の創作物について思うこと」では、村上のカルト宗教への向きあい方について、研究者としてではなく、カルト宗教の家で育った当事者のひとりとして、考えることを述べた。本書には収録しなかった観点を含んでいるので、よかったらご参照いただきたい。」——実際、当該書物を繙くと、村上作品として、『神の子どもたちはみな踊る』等に加え、かなりの頁数を割いて『1Q84』をめぐる見解が記されている。この長篇は、氏が「村上春樹に対して本格的に興味を抱くことになった」「思い出深い作品」(『みんなの宗教2世問題』p.310) とのことで、それだけにこの「当事者批評」は、研究者としてのスタンスを超えた重みをもっている。曰く、「村上には敵役として設定された人物〔引用者注：深田保を指す〕にも村上なりの真理を語らせているわけで、筆者はこれを村上なりの公平さへの希求として認める一方で、この作家なりの甘さをも感じざるを得ない。村上には〔中略〕宗教問題が絡むとなると、とたんにそれを単純な悪と決めつけるのをやめて、善悪の彼岸をめざそうとする。それは結局、この作家がカルト宗教というものを父権制以上の悪としてリアルに把握できないからではないのか、という疑いをもたらす」(同 p.325)。評者は村上を研究する者の一人として、彼が父権を善悪の彼岸に設定していくのは、例えば『海辺のカフカ』や『騎士団長殺し』等にも見られる近年の傾向であって、必ずしも宗教絡みだとばかりは言えないのではないかと考える一方、この横道氏の提示する『1Q84』を対象とした「当事者批評」の語りにも胸を衝かれる思いがする。元来「当事者批評」をも含めて構成された本書『村上春樹研究』から敢えてこの『1Q84』論を外した氏の、研究者としての見識には頭を垂れつつ、それでもなお、氏を俟って初めて成された得難い『研究』の全体

像を見渡すためには、本論考が、「よかったら」ではなく、是が非でも「ご参照」される必要があると、強く確信するものである。

それにしても、あらためて舌を巻くのは、年を越してもなお横道氏の新著刊行ペースが相変わらず衰えを見せないことだ。氏が発刊に先立って教えてくれた情報によれば、本『研究』を受け継ぐ成果は、今後出版される書籍を通じ、少しずつ世に広めていくことになるらしい。村上春樹研究の領野に、これだけ多量の散種を行なった氏であるからには、今より後も、必ずやこの大いなる〈序章〉、あるいは助走に繋がる結果を見せていってくれるに違いない。我々はそれを、本書の頁を繰り返しながら待ち続けていこうではないか。